

■ 脱構築研究会「ジャック・デリダ『メモワール——ポール・ド・マンのために』を読む」

2023年7月15日（土）14:00～17:00 東京都立大学南大沢キャンパス 1号館110教室 宮崎裕助

第Ⅱ部 貝殻の奥にひそむ潮騒のように——ポール・ド・マンの戦争

【経緯】英語版第二版で増補されたもの。初版に収録された第Ⅰ部の講演は、1983年12月のド・マンの死後、1984年3月に行われた。その3年後の1987年12月1日付『ニューヨーク・タイムズ』「イェール学派が書いた記事、ナチスの機関紙で発見」¹以後に生じた騒動（戦争）を受けて執筆された。

【何があったのか】ド・マンは1948年に29歳で渡米したが、それ以前の21歳のド・マンがベルギーの全国紙『ル・ソワール』の文芸欄に寄稿していた記事が、反ユダヤ主義的な内容を含むものであることが暴露されて、大きなセンセーションが惹き起こされた。

【伯父の影響】当時『ル・ソワール』はナチス・ドイツ占領軍の統制下にあったド・マンの伯父は、社会主義理論家アンリ・ド・マン／ベルギーの対独協力をした大物政治家（298頁註8でデリダ自身が小伝を記している）

【脱構築への攻撃】これによって、脱構築に反感をもっていた者たちが一斉にド・マンやデリダを攻撃しはじめた。彼らによれば、脱構築が意味の曖昧さや相対主義・懐疑主義を主張するのは、かつてナチだった後ろ暗い経歴を免罪するためだった。ナチの過去は黙っていたし、仮にそれが暴かれてもどうとも解釈できるようにするために、脱構築などということを言い始めた。

→ ファリアス『ハイデガーとナチズム』が出たときに、ハイデガーを擁護したデリダはナチズムに染まっていると見られたことと連動している。

→ 70年代に合衆国の人文学に流入したフレンチ・セオリー全般がうさんくさく見られるようになった。ソーカルやミチコ・カクタニのポストモダニズム批判に通じる主張。

【なぜデリダはこれを執筆したのか】アメリカの有名な批評誌『クリティカル・インクワイアリー』から打診を受け、デリダはド・マンの友人として、長年活動を共にしてきた仲間として、こうした騒動に応答する責任があると感じた。そのためにこそ、若き日のド・マンが遺した記事の分析に着手することを決意した。これが、本書第Ⅱ部をなす長大なテキストの中核をなす。

【いかに応答したのか】デリダは青年ド・マンの記事をめぐって、ド・マンを周囲の攻撃からかくまうべく、かつての友人として免罪したのか。それともやはり有罪は有罪であり、デリダは厳しくド・マンの罪を追及しているのか。→ どちらでもあり、どちらでもない。

ともかくこの長大なテキスト——本書の3分の1を占め、訳書ではゆうに100頁を超える——がどういう構成をもつものなのか。

*以下【 】内数字は邦訳ページ数

¹ <https://www.nytimes.com/1987/12/01/nyregion/scholar-s-40-s-articles-debated.html>

【183-：タイトルについて】「ポール・ド・マンの戦争」とはいかなる戦争か。

- ・新聞紙上で布告された戦争（ド・マンを訴訟にかける戦争）
- ・第二次世界大戦（ド・マンが生きた戦争）

→ ド・マンの記事を読むにはこれらの「戦争」への徹底した調査・分析が必要である。

【189：責任への問い】「われわれに到来するものへの応答責任」を引き受けること。予見不可能な呼びかけ。→ 電話による呼び出しとして。

【191】二つの電話の呼び出し——1『クリティカル・インクワイアリー』誌からの寄稿依頼

→ド・マンの記事を分析し意見を述べるのはじめての発言者であることの要請

——2 サミュエル・ウェーバーを介してオルトウィン・ド・グラーフというベルギー人研究者からの呼びかけ（これは『ニューヨーク・タイムズ』の記事の四ヶ月前の出来事）／ド・マンについての博論を準備していたが、青年ド・マンの記事を発見し危険なものであることをみてとって連絡してきた／（全体は200本以上あることが判明するが）この段階で125本の記事を選んできた。

【197：青年ド・マンの記事へのデリダの印象】非凡な青年の若書きだが、たんに非政治的ではなく、相当事態は複雑で深刻にみえた。伯父のアンリ・ド・マンの徳憑で、大手新聞の文芸欄を任されたことに得意になって書いた記事／「粗雑だがイデオロギー的形勢」と呼びたいもの。／一読してまずは傷つき、呆然として、悲しみにくれた。

【200：前哨戦】今回の問題以前にデリダは1940年の記事を読んだことがあった。ドイツ占領下以前の記事。『自由検討手帖』第4号の編者論説。まだ反ドイツで、民主主義への賛成をうたっていた。しかしド・マンの記事を読んで狼狽した点があった。

- 1 西洋文明の執拗な言及。「西洋の頹廃」は反民主主義へと滑り落ちていく
- 2 個人の解放に疑念が呈されている
- 3 新しい「秩序」への呼びかけ

【205：問題の記事分析】今回問題になったのはドイツ占領下での記事。『ル・ソワール』と『ヘット・フラームス・ラント』。デリダは「一方で……、他方で……」の両面においてド・マンの記事を読んでいく。

一方では、ドイツ占領軍への迎合的なレトリック。ドイツ覇権下でのヨーロッパ統一のイデオロギーにそくした主張。

他方では、絶え間なくそうしたイデオロギーと齟齬・乖離・葛藤をきたしている反命題が含まれている。つまりダブル・バインドがある。

→ この「一方で……、他方で……」をA、B、Cの三つの面で追及していく。

【208】A——「一方で」ドイツの勝利を前提とした右翼による国民革命。

——「他方で」たとえばアンリ・ド・モンテルラン（フランスの作家、対独協力者）の政治的言説を引きながらその信用を失墜させる。アイロニーの働き。文学の自立性、ヒトラー主義に対する冷淡さ。

【222】B——「一方で」ナショナリズムへの問題関心。ド・マンの出自であるフランドルの民族主義の政治参画への接近。

——「他方で」ナショナリズムがすべての民族的差異を尊重することで成り立つという逆説が示されている。フランスの個人主義の称揚。

【231】 C 「現代文学におけるユダヤ人」 (1941年3月4日付) の記事

→ もっとも問題含みで「もっとも耐えがたい」と思われる記事

「一方で」明確な反ユダヤ主義が含まれている。「まったく異論の余地のない仕方での、暴力的でステレオタイプなユダヤ主義の表明」／「人種主義 (レイシズム)」にたいする警戒が欠落／「人間のタイプ」へのたえざる言及／「赦しえない暴力」

西洋の知識人たちが文学という文化を代表するような領域でユダヤ的影響から自己を守ってこられたということは、彼らの活力の証しなのである。われわれの文明が外国の力に侵略されるままになっていたなら、われわれの文明は将来への希望を断念しなければならなかったであろう。ヨーロッパ人の生活のあらゆる局面にユダヤ的干渉があったにもかかわらず、われわれの文明はけがれなき無垢の独自性と性格を保持することで、みずからの深い本性が健全なものであることを示したのである。加えて、以上のことからお気づきの通り、ヨーロッパから隔離された地にユダヤ人居留地を設営しようというユダヤ人問題の解決は、西洋の文学生活には、少しも嘆かわしい結果をもたらさないだろう。西洋の文学生活は、一切合切をひっくりかえしてみても、凡庸な価値しかもたないいくつかの個性を失うだけで、これまで同様、みずからの偉大な進化法則に従って発展し続けていくことであろう。²

【237】 「他方で」ド・マンは「通俗的反ユダヤ主義」(ユダヤ化された小説を墮落したものとして斥ける立場)を糾弾しているが、卓越した真の反ユダヤ主義について語っていない限り、反ユダヤ主義とは本質的に通俗的であり、反ユダヤ主義それ自体を糾弾することを含意するのではないか？

【238】 ド・マン記事そのものは全体としては反ユダヤ主義的な論調の記事の枠に嵌められているが、ド・マンの口ぶりは反体制順応主義的であり、暗に皮肉を投げかけているとも読めるのではないか？／「ユダヤ人小説」というカテゴリーを用いること自体への批判になっているのではないか？

→ しかし他方、最終段落は、ユダヤ人作家を具体的に名指しており、「ユダヤ的干渉」の無意味さや、「ユダヤ人問題の解決」への言及は、弁解の余地はない。だが、末尾の異質な文章は、編集部が最後に介入してきた可能性を拭えない。

【248】 以上まで、デリダが直接青年ド・マンの新聞記事を読解した箇所。以下は『ニューヨーク・タイムズ』の暴露記事が出る以前に、オルトウィン・ド・グラーフの連絡によって生じた事態に対応するために取った措置をデリダが自分で振り返った部分。

→ ド・マンの関係者の集まりで、このテキストを対象としたシンポジウムを開くことを提案した。

→ この成果を通じて、ド・マンの初期テキストを集成した論集と、それを論じた論集³を刊行することにつながった。

【251-258】 そのシンポジウムでデリダが話したことが転載されている。そこで言われていることのうち、注目すべき事実。

——1955年当時ハーヴァードにいたド・マンにたいして匿名の告発があり、戦時中のベルギーでのド・マンの行動についてのものだった。ド・マンはその告発に応じて、ハーヴァード大宛に自分が文芸コラムを担当していたことを認めたが、ドイツの検閲が厳しくなったときに担当をやめたと述べていた。ド・マン自身、対独協力をしたことはなかったと釈明し、ハーヴァード大から承認されていた。

² 訳文は、土田知則『ポール・ド・マンの戦争』(彩流社、2018年)、51-52頁を参照している。

³ それぞれ以下を指す。Paul de Man, *Wartime Journalism 1939-1943*, University of Nebraska Press, 1988 および *Responses: On Paul de Man's Wartime Journalism*, eds. Werner Hamacher, Neil Hertz, Thomas Keenan, University of Nebraska Press, 1989.

デリダも付け加えているように、戦後のベルギーでは対独協力者の粛清があったが、ド・マンは一切とがめられていなかった。反ユダヤ主義的な新聞記事を執筆したこととは別に、公的には、ド・マンは「無罪」であったということを示している。

【258：ド・マンの沈黙】 ド・マンはいわば公的に潔白だったのになぜそのことに沈黙していたのか。
→ 自分の「疑わしい」過去をみずからひけらかすことは「痛々しく、無益に苦しんでみせる演劇化」になるおそれがあった。「いささか滑稽で不遜なふるまいであり、際限なく事態は錯綜するだろう」。ずいぶん後になって「告白」することは、かえって慎みを欠いたふるまいとなる恐れがあった。

【262】 初期著作との関連で、いかにド・マンのテキストを読むべきか。

- 1 まずもってこれらの初期テキストを無視しないこと。その全体を考慮に入れること。
- 2-a 初期著作とのちのド・マンの成熟期の著作を切り離す誤りを避けること。初期著作に含まれるド・マンの「前史」を抑圧してはならない。
- 2-b 他方で、全体を初期著作という「起源」に還元するような誤りも断じて避けなければならない。今回の事件でド・マンを攻撃する者たちがしている誤り。そのような歴史の全体化こそ、ド・マンが「自伝の問い」を通じて抵抗し続けていたもの。

【270：全体主義の脱構築】 こうした誤読に陥らないための二つの方針。

- 1 他者にたいする尊重。他者に、その著作に耳を傾け続けること。
- 2 全体主義の論理を反復しないこと。全体主義の脱構築。というより、それが脱構築そのもの。全体主義批判そのものが陥りがちな全体化をも避けつつ、全体化の企図とその帰結を分析し、そこに含まれるイデオロギー的で政治的な含意を突き止めること。これこそが脱構築と呼んだものだ。ド・マンを攻撃する論説のほうにこそ、これらの誤謬が認められた。
・脱構築は「全体主義の危険を同定しそれと戦うための条件、少なくともその必要条件である」。脱構築を通じたデリダの「これまでの実践はまたみずからを全体主義から解放するためのものだった」。
→ ユダヤ人や抑圧されてきたマイノリティであることを盾に取った当事者主義がかえって人種主義と癒着する可能性。脱構築は、これらの癒着の回帰をたえず分析しつづける。
→ デリダの仮説：ド・マンは青年期の過去の断絶したあと、合衆国で40年間にわたってしてきた著作のなかでこのような過去の回帰につねに問いかけ、繰り返し断絶と転位を図っていた。

【277：ド・マンの戦争】 ド・マンは当初脱構築に批判的だった。しかしのちにド・マン独自の意味で脱構築が用いられるようになった。これは、ド・マンの脱構築は形式的な応用だという意味で、ド・マンが歴史と政治に無関心であることを意味していない。「ド・マンは、繊細な耳の持ち主であれば彼を聞き解するすべを知ってくれているし、この主題でわざわざ戦争にまつわる打ち明け話をする必要もないと考えたにちがいない。実際には、彼はただそのことについてしか語らなかった。彼はただそのことについてしか書かなかったのだ」。

- 1 乖離していると同時に結びついた二つの時間性と歴史。二つの生。ベルギー時代とアメリカ時代。
- 2 この青年期の著作発見は、有益な試練として捉え直されるべき。継承すべき遺産のうち、そもそもなんらかの毒を含まない遺産はない。ド・マンの遺産は、どんな最良の遺産にも毒があるのと同じ。デリダの懸念：「私のふるまいは、そうすべきでないものを擁護し救済し正当化しようとした試みに見えてしまうのではないか」。→ 実際、デリダのこの長い論文はあとでさらに反発を引き起こした。

【281：電話の呼び出し音ふたたび】 ド・マンは反ユダヤ主義者ではなかったと証言するベルギーレジスタンスの当事者の声。ド・マンはレジスタンス運動の刊行物『沈黙の行使』の刊行に尽力していた。